

研究ノート(3)

ユダヤ教テキストにおけるメシア思想と黙示思想
——ジェームズ・C・ヴァンダーカムの論文「メシア思想と黙示思想」について——

足 達 賀代子

はじめに

黙示思想の歴史を通覧し、その概要を理解することを目的として研究ノート(3)を作成する。(1)、(2)でも用いた *The Continuum History of Apocalypticism* (Abridged Edition by Bernard McGinn, John J. Collins, and Stephen Stein. New York: Continuum, 2003) より、今回はユダヤ教テキストにおけるメシア思想と黙示思想について論じた第5章 “Messianism and Apocalypticism” (pp. 112-38、「メシア思想と黙示思想」)を取上げる。筆者ジェームズ・C・ヴァンダーカム (James C. VanderKam、ノートルダム大学神学部名誉教授) は、初期ユダヤ教及びヘブライ語聖書研究の第一人者である。20年にわたり死海文書とその関連文献の研究に専念し、死海文書公刊準備委員会のメンバーとして貢献した。*Discoveries in the Judaean Desert* シリーズ (所謂「ユダの荒野で発掘された十二小預言者の断片」)のテキストを翻訳や注釈を付して出版したもの。Oxford: Clarendon Press, 1951-2011) 全40巻中13の巻の編集にあたり、*Encyclopedia of the Dead Sea Scrolls* (ed. Lawrence H. Schiffman and James VanderKam, New York: Oxford University Press, 2000) の編者でもある。1994年出版の *The Dead Sea Scrolls Today* (Grandrapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing. 邦訳『死海文書のすべて』秦剛平訳 青土社 1995年) は、翌95年、“the Biblical Archaeology Society’s Publication Award for the Best Popular Book on Biblical Archaeology” を受賞した。同書は6つの言語に翻訳されたうえ、2010年には第2版が発刊された。その他の近著は、*From Revelation to Canon: Studies in the Hebrew Bible and Second Temple Literature* (2000)、*An Introduction to Early Judaism* (2001)、*The Meaning of the Dead Sea Scrolls* (2002)、*From Joshua to Caiaphas: High Priests after the Exile* (2004)、*1 Enoch 2* (2012)、*The Dead Sea Scrolls and the Bible* (2012) などである。¹

ヴァンダーカムの上記論文が扱っている「メシア思想」の「メシア (Messiah)」とは、ヘブライ語「マーシーアハ (māšīaḥ)」に由来し、「油注がれた者」すなわち「聖別された者」の意味である。ギリシャ語新約聖書では「キリストス (christos)」と訳され、ナザレのイエスがこれにあたり、「救い主」、「救世主」の意味で用いられる (『ヨハネによる福音書』1:41、「彼 [アンデレ] はまず自分の兄弟シモンに出会って言った、『わたしたちはメシヤ (訳せば、キリスト) にいま出会った』。」を参照)。² また、転じて、迫害を受けている者を救済し、解放する者といった、より一般的な意味でも用いられる (*The Oxford English Dictionary*, “Messiah” の項参照)。

ヴァンダーカムの上記論文では、主として旧約聖書、同外典・偽典、死海文書、古代ユダヤの著作の中で「メシア」、「メシア思想」がどのように表れているかを個々のテキストに丁寧にあたりながら検討している。「メシア」、「メシア思想」の源流とその発展過程をたどり、それぞれのテキスト及びその時代におけるこれらの語の意味をとらえることにより、黙示思想における終末の「審判者」、「世界の刷新者」としてのメシア像との関連性の有無、また、関連があるとすればどのような関連性を示そうとする有意義な議論が展開されている。以下、ヴァンダーカムの論旨をなるべく忠実にたどりながら、ノート作成者 (以下、「作成者」) による全訳 (試訳) に基づき、重要部分の要約を行いながら適宜注釈を加えていく。作成者が加えた解説や補足説明部分には括弧内注記を付し、要約部分と解説部分の区別の明確化に努めるが、読者の煩雑を避けるため適宜簡略化する。また、ヴァンダーカムによる膨大かつ詳細な注及び文献リストについては残念ながら割愛する。

ジェームズ・C・ヴァンダーカム、「メシア思想と黙示思想」

1 序論 (pp. 112-5)

(1) 「メシア」と「メシアニズム」

「メシア (messiah)」という語は、ヘブライ語聖書 (「律法 (トーラー)」、「預言者 (ネビーイーム)」、「諸書 (ケスービーム)」の24書からなるユダヤ教の聖典。タナハ [Tanakh] と呼ばれる。旧約聖書のこと) 中で頻繁に表れ、用法は次の

5つである。(1)神によってメシアの役割へ選任されたしるしとして頭に油を注がれたイスラエルの王たち。サウロやダビデら歴史上の王に言及する例と、神秘的、理念的な文脈中で神の子と同一視される王に言及する例がある。(2)書き手が「油注がれた祭司」と呼ぶイスラエルの大祭司たち（『レビ記』4:3, 5, 16; 6:15、『詩篇』84:10）。(3)ペルシアのキュロス大王（注 アケメネス朝ペルシアの創始者。c.585-c.529 B.C。『イザヤ書』45:1の「受膏者クロス」のこと）。(4)未来の王（『ダニエル書』9:25, 26）。(5)族長たち（『詩篇』105:15 = 『1列王記』16:22）。(1)と(2)が本論の目的にとって最重要である。王、高位聖職者の両方が神の「油注がれた者」と称されることがあり、また、この語は(4)のように未来の指導者を指す特別な使い方がなされることもある。

神に選ばれた支配者が未来に現れるという信仰は次第に形成された。聖書では、例えば『ダニエル書』9章25-26節は次のように預言している。「25 エルサレムを建て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六十二週あることを知り、かつ悟りなさい。その間に、しかも不安な時代に、エルサレムは広場と街路とをもって、建て直されるでしょう。26 その六十二週の後にメシヤは断たれるでしょう。」25節の「メシヤ（油注がれた王）」とはバビロニア捕囚以後最初の大祭司ヨシヤのことであろう。また、26節の「メシヤ（油注がれた者）」は大祭司オニアス3世と解されているが、彼は紀元前175年に職位を追われ、その後処刑された（Collins 1993, 355-56）。『詩篇』2篇1-2節には「なにゆえ、もろもろの国びとは騒ぎたち、もろもろの民はむなしい事をたくらむのか、地のもろもろの王は立ち構え、もろもろのつかさはともに、はかり、主とその油そそがれた者とに逆らって……。」とあるが、この箇所は、ダビデの子孫である「油注がれた君主」が世界の支配者となるという信仰の典拠を示している。この「油注がれた王」は後に同詩篇中で、諸々の民を征服し地の果てを手中に収めることとなる神の王（「わが王」2:6）、神の息子（「わたしの子」2:7）と同一とされる（2:8）。

「油注がれた者」という語はヘブライ語聖書中38回ほどあらわれ、どの場合も指導者に対して用いられている。だが、「メシア」及び「メシア思想」という語の適切な用法については議論がなされてきた。これらの語は、「油注がれた者」が言及される箇所と明確に「メシア」と称される人物が登場する終末論的文脈中だけに制

限されるべきだろうか。あるいは、この語をもっと広く、終末の時の指導者なら誰にでも、また、そのような者を含む思考パターンに用いることは許されるだろうか。古代のテキスト中の使用法から判断するなら、広い意味での理解が可能であることに殆ど疑いはない。ヘブライ語聖書に含まれる種々の預言的テキストは未来の王たる指導者に言及しているが、彼を「メシア」とは呼んでいない。例えば、イザヤは次のように預言する。「エッサイの株から一つの芽が出、その根から一つの若枝が生えて実を結び……」(11:1)。その者は人並み外れた資質を与えられ、その治世は理想的であり、彼の代には離散させられた者たちは集められ、彼らの敵は打ち倒される(11:2-16)。また、エレミヤは未来について語りながら、神が次のように述べるのを引用する。

主は仰せられる、見よ、わたしがダビデのために一つの正しい枝を起す日がくる。彼は王となって世を治め、栄えて、公平と正義を世に行う。その日ユダは救を得、イスラエルは安らかにおる。その名は『主はわれわれの正義』となえられる。(『エレミヤ』23:5-6)

イザヤもエレミヤも「油注がれた」という言葉を用いていないが、神の民の未来において、地上の「油注がれた」者たち、つまりダビデの子孫である王たちが後継者を得ることを明言している(『イザヤ』7:14; 9:1-6 他参照)。この点はダビデへの約束からも明らかである。

あなたが日が満ちて、先祖たちと共に眠る時、わたしはあなたの身から出る子を、あなたのあとに立てて、その王国を堅くするであろう。彼はわたしの名のために家を建てる。わたしは長くその国の位を堅くしよう。わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となるであろう。……あなたの家と王国はわたしの前に長く保つであろう。あなたの位は長く堅うせられる。(『サムエル記下』7:12-14a、16)

後のテキストでは、終末の時の指導者が呼ばれる「油注がれた者」やその他の称号は同一人物に併用されることがある。したがって、そうした文脈では「メシア」という称号が見られなくても、少なくともヘブライ語聖書における初期のメシア思想について語ることは可能である。そこで預言される未来には、いかなる称号で呼ばれるにせよ、ダビデの家系から出る新たな指導者が含まれることがある。これら

のことから、メシア思想とはそのような指導者を中心とした、もしくはそこでメシアが重要な役割を果たすような思考のモードと言えよう。

(2) 黙示文書と黙示思想

黙示文書、黙示思想、及びその関連語の適切な用法に関する長い議論は現代でも続いているが、本論文では、ジョン・コリンズが『セメイア』誌で示した定義を基本としている。

黙示文書とは物語のフレームワークを備えた啓示文学のジャンルであり、ここでは啓示は現世を超えた存在によって受け手である人間に伝えられ、超越的現実が開示される。それは、終末的救済を予見する限りにおいて時間的である。同時に、現世とは異なる超自然的世界を包含する限りにおいて空間的でもある。³

黙示文書には宇宙や天上の現象に関する開示など終末論的でない主題が含まれているが、これらはしばしば終末論的な主題と結び付いている。また、黙示的な思考は、公的に黙示文書と定義される書物だけでなく、遺訓の書や託宣など他ジャンルの書物中にも見出される。

ヘブライ語聖書は後のユダヤ教の黙示的な著作や思考にも根拠を与えた。ヘブライ語聖書中、唯一間違いなく黙示文書であるのは、幾つかの幻が開示される『ダニエル書』7-12章である。だが、より早い時期の預言的テクストを「原黙示文書(proto-apocalypses)」と考える学者も多い。もしコリンズによる黙示文書の定義を採用するなら、ヘレニズム時代以前にはユダヤ人著述家によって書かれた黙示文書はない。このことは、『イザヤ書』24-27章や『ゼカリヤ書』1-8章を黙示文書もしくは少なくとも原黙示文書と考える者は異なる定義に依っていることを示している。F・M・クロスはヘブライ語聖書中、幾つかの後代の預言的テクスト中に「預言の伝統と王の観念の再公式化があること」を指摘して、それらは「黙示思想の根本的特徴とモチーフ」を示すことから、「黙示の起源は紀元前6世紀まで遡って探求されなければならない」(1979, 343)と論じている。黙示思想の特徴として次の3つを挙げている。(1)「古典的預言の主題と形式を大衆化(democratize)し終末論化すること」、(2)二つの時代を説いていること、(3)「歴史を形作り、……超越的意

味を歴史に与えるために用いられる創造神話の影響の復活が見られること」(1973、346)。O・プルーガーとP・ハンソンも、黙示の最初の文献例をバビロン捕囚以後の歴史の初めに位置づけ、黙示的思考の誕生を担った集団について述べている(Plöger 1968、Hanson 1975)。黙示文書の著書たちがより早い時期の聖書の素材を用い、ある程度聖書の形式を模倣したことは明らかだが、コリンズの言う意味ではユダヤ教徒の著述家は誰も紀元前3世紀まで黙示文書を書かなかった。今日、最古のユダヤ教の黙示文書は大洪水以前の預言者エノクを主題としたテキストであることを強く示唆するエビデンスが存在している。

黙示文書の重要なモデルと典拠は聖書の預言文書によって与えられた。預言的モデルの一つは玉座の幻であり、預言者が神聖な存在に近づき、神とその天使的助言者達の間で交わされる地上の事柄についての議論を聞くことを許される(『列王記上』22、『イザヤ』6、『1エノク』14参照)。『エゼキエル書』40-48章などに由来する別なモデルでは、新しいエルサレムや神殿へ、また国中をめぐる旅へと天使が預言者を伴う。預言者に開示され、神や天使によって説明される象徴的な幻(例『アモス』7-9、『ゼカリア』1-8)や秘密のメッセージ(『ダニエル』9)もある。おむね黙示文書中には、最後の審判やその後続く世界の一新という預言的終末論の一連の流れが反映されているが、他方、夢解釈に見られるような占トや推測を特徴とするものもある。例えば、謎めいた象徴的な夢が幻視者に開示され、彼はコード化されたメッセージの説明を天から受け取る。その説明は過去と現在の状況から未来を啓示する(例えば『ダニエル』7参照、VanderKam 1984、52-75)。

2 初期ユダヤ教におけるメシア思想 (pp. 115-27)

ユダヤのテキスト中では誰がメシアと考えられたのだろうか。また、彼(ら)は何をなすよう期待されたのだろうか。本節では、これらの点について、上記定義上の「黙示文書」に属するテキスト及びそれ以外のテキストを検討していく。メシアという称号だけではなく、未来の支配者(たち)に用いられる他の称号と彼らに与えられる資質と役割の性質についても考えていく。

(1) 初期ユダヤ教黙示文書中のメシア的指導者たち

コリンズの定義により黙示文書とされる初期ユダヤ教テキストにおいてメシア的指導者が現れ始めるのは、1世紀以降のようだ。だが、1世紀においてもそのような指導者が描かれていない黙示文書もある。以下、個々の文書について可能な限り年代順に考察が行われる。次表は、本節で考察される初期ユダヤ教黙示文書をヴァンダーカムがコリンズによる黙示文書の類型に基づいて行った分類をもとに、作成者がまとめたものである。

	類 型	書名（メシアへの言及あり）	書名（メシアへの言及なし）
I a型	歴史的黙示で異界の旅を伴わないもの	「動物の黙示録」 『第二バルク書』 『第四エズラ書』	「週の黙示録」 『ダニエル書』7-12章 『ヨベル書』1章及び23章
II a型	歴史的黙示で異界の旅を伴うもの	『アブラハムの黙示録』	
II b型	宇宙的・政治的終末論を伴う異界の旅	「エノクのたとえの書」	「天文の書」 「寝ずの番人の書」 『レビの遺訓』2-5章
II c型	個人的終末論のみを伴う異界の旅		『ゼパニヤの黙示録』 『アブラハムの遺訓』 『第三バルク書』

(典拠 John J. Collins, "Introduction," *Semeia* 14 (1979): 14-15)

「エノクの天文の書」（『第一エノク書』72-82章。旧約聖書偽典）

この書の成立は紀元前3世紀に遡るとするのが通例である（Milik 1976、7-11）。宇宙の旅の道すがら天使ウリエルがエノクに与えた天文と地理に関する啓示の記録と称していることから、黙示文書と考えることができる。72章1節におけるウリエルによる開示は「この世のすべての歳と永遠に、永遠につづく新しい作品ができるときまで」（4巻239）とされている。⁴ この書では、終りの時のメシア的指導者は全く現れない。

「寝ずの番人の書」（『第一エノク書』1-36章。旧約聖書偽典）

この書も前3世紀のものとされている（Milik 1976、22-23）。黙示的な特徴が認められる部分（1、10-11、14-15、17-36各章参照）もあるが、メシアや人間の指導

者については一言も述べられていない。つまり、終末を描く部分にはメシアが含まれておらず、神と天使達はメシアなしに業を行う。

「週の黙示録」（『第一エノク書』93:1-10、91:11-17。旧約聖書偽典）

この書では、超常的権威をもつ典拠（書物、天上のヴィジョン、聖なる天使の言葉、天上の板 [93:1-3]）によってエノクが歴史の過程と「週」と呼ばれる10の区分からなる審判を解き明かす。第8週で正しき者達は罪人達を罰する剣を受け取り、第9週で全世界に正しき審判が開示され不敬な者たちの行いは消滅し、世界は破滅する。そして第10週では番人たち（注 天使たち）に対する永遠の審判と新たな天の創造が述べられる。その後は罪が完全に取り除かれた無数の週が続く。このテキスト中に登場する者は誰もメシア的指導者と解釈されていない。

「動物の黙示録」（『第一エノク書』85-90章。旧約聖書偽典）

「動物の黙示録」も、「週の黙示録」同様、聖書的歴史を概観し歴史のその先を述べる。テキストでは、夢や夢の幻の形で歴史的出来事が語られる（85:1-2）。この書では人間の象徴として動物が、天使やそれに類した存在の象徴として人間が用いられている。象徴的に描かれた聖書的歴史の概観の中には文脈的に当てはまらないものもあるが、著者の時代（紀元前160年代）の記述に達すると、羊（＝イスラエル）のあいつぐ敗北が「これらの羊の一匹に大きな角がのびる（まで）」（90:9、4巻266）語られる。敵は「その角をはずそうと欲したが果たさなかった」（12、4巻266）。この羊または雄羊はイスラエルの敵たちによる一斉攻撃を受ける。だが、「これは彼らと相手に、はげしい戦いとなったが、これは、助太刀を大声に求めた」（13、4巻266）。記録の天使（注 専制的な牧者らの名前を書きとめる天使）は天の助けが到来することを羊に告げる（14）。敵たちの最後の攻撃に続き、神の決定的介入と羊の勝利が語られる（16-19）。巨大な角のある羊または雄羊をメシアと理解することはできるかもしれないが、多くの注釈者はユダス・マカバイオス（紀元前160年頃没。ユダヤの英雄。シリアの支配に抗してユダヤ人の反乱を指揮、エルサレムを奪回してユダヤ教を再興した）を表わすと考えている。

もっとメシアにふさわしい候補は90章37節で「白牛」（白い雄牛）と呼ばれる

人物である。それは最後に生まれ、「その角は巨大で、野の獣、空の鳥に一樣に恐れられ、彼らは四六時中これに閉口していた。わたし（エノク）は、彼らのすべての種が変化し、いずれも白牛になるのを見た。そのなかの最初のものが（水）牛になり、この小羊は大きな獣になった。その頭には真っ黒な巨大な角が生えていた。羊たちの主は、彼ら及びすべての牛を喜ばれた」（37-38、4巻268）。だが、この白い雄牛は、終りの時に特別な存在として際立つわけではない。なぜなら、「彼らのすべての種が」白い雄牛になるからである。「『ダニエル書』7章の〈人の子のような者〉のように、その者（白い雄牛）は世界の歴史の終りに到来し、全世界の支配権を与えられる。ダニエルの〈人の子のような者〉とは反対に、動物で象徴されているという事実によって示されるとおり、この者は人間である」（Tiller 1993、384）。間もなく皆がこの白い雄牛と同じ姿となることは、彼の使命が「明らかに、全人類の変身にとって一種の触媒になること」（同385）であることを必然的に意味する。「動物の黙示録」は終りの時のメシア的指導者に言及する最古のユダヤ教黙示文書であると思われる。彼は、同時代人と異なった存在ではないが、諸々の民の上に力を行使する特別な人物である。

『ダニエル書』

7章では海から現れる4つの獣の幻が語られる。「日の老いたる者」（すなわち神）が玉座に座す審判の場面で、角のある第4の獣は処刑され、他の獣たちは主権を剥奪される。「わたし（ダニエル）はまた夜の幻のうちに見ていると、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。彼に主権と光栄と国とを賜い、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、なくなるものがなく、その国は滅びることがない」（7:13-14）。この「人の子のような者」は明らかにメシア的特質を備えていると考えられてきた。一方、この者は天使ミカエルを表すと考える学者もおり（Collins 1993、304-10）、もしそうなら、この者は人間界に属するメシア的人物ではないことになる。

8章では、2つの角のある雄羊（メデアとペルシアの王）、雄山羊（ギリシャの王。8:20-21参照）、そして雄山羊の巨大な角が分裂してできた4つの王国が幻の中

心である。この幻は、「定められた終りの時」(19)に関わるものである。最後の敵は裁かれ、「人手によらずに滅ぼされる」(25)。この幻には、メシアまたは善良な者達を代表する人間は現れない。

9章でダニエルは、エルサレムは70年の間荒れ果てるであろうというエレミヤの預言(『エレミヤ』25:11-12; 29:10)について考えを巡らせ、民への許しを祈り求め、破壊された聖所と都市を思い出してくれるよう神に祈る。この場面は、預言の伝統が黙示文書の書き手にいかに影響を与えていたかの一例である。そこへ天使ガブリエルが到来し、謎めいた預言の意味を彼に説明する。ガブリエルは70年とは実際には70週(週とは7の意味。従って7×70年)を意味することを指摘し、さらに、エルサレム再建の命令から「メシヤなるひとりの君」(9:25)の到来まで7週の期間があることに特に言及する。「その62週の後にメシヤは断たれるでしょう。……またきたるべき君の民は、町と聖所とを滅ぼすでしょう」(26)。上述の通り、このメシアとは大祭司オニアス三世と考えられているが、テキスト中には、彼が着任にあたって古代の大祭司たちと同じように油を注がれたという文字通りの意味以上には、いかなる意味でも彼がメシア的指導者としての役割を果たしたという指摘はない。

10章の幻でダニエルは「亜麻布の衣を着た人」(10:5-6)に出会うが、恐ろしい姿をしたその者は「末の日に、あなたの民に臨まんとする事を、あなたに悟らせるためにきた」(10:14)と述べる。この黙示的な幻はペルシアの王(11:2)、ギリシャとそれに続く王国の王たち(11:3-45)、南の王たち(プトレマイオス朝)、北の王たち(セレウコス朝)、特に、「卑しむべき者であって……王の尊厳が与えられ」(11:21)ないとされるアンティオコス四世(在位175-163)について語っている(11:21-45)。唯一肯定的に描かれている終末の指導者は「民のうちの賢い人々」(11:33)である。彼らは人々に理解を与え、迫害を甘受し、他の者たち(マカバイオス家と解される)から「少しの助け」(34節)を得る。アンティオコスの死後(11:45)、「あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ち上がる」(12:1)。苦難の時が生じるが、ダニエルの民、「あの書に名を記された者は皆」(12:11)救われる。多くの死者が目覚めますが、永遠の生命に至る者と限りなき恥辱を受ける者がある(12:2)。ここでは、天使ミカエル以外、メシアやその他の終末の指導者に

については何も述べられていない。

したがって、『ダニエル書』後半の黙示的な幻のすべてにおいて、終りの時のメシア的の王やそれに類する者は存在しない。その激動の恐怖に満ちた日々における神の民の唯一の指導者は天使であり、天使を通して神自身が業をなすのである。

『ヨベル書』（旧約聖書偽典）

この書の成立年代は紀元前2世紀半ば頃とされている。この書は正式には黙示文書ではないが、黙示文書と解されてもよい2つの箇所を含んでいる。第一は1章、シナイ山上で神はモーセに直接語りかけ、神の驚くべき誠実さと忍耐にもかかわらずイスラエルが将来、神との契約に背くことを述べる。イスラエルは罪を犯し、神は人々に警告するため預言者を遣わすが、彼らは使命を果たせず、神との契約へと民を帰順させることができない。すると神は民から顔を隠し、彼らを諸々の民へと引き渡す。彼らは祖先の土地から遠ざけられ、罪を犯し続けるが、後に、離散先の地で悔い改めるであろう。その結果、主は彼らを集め、彼らの祖先の土地で正しき苗木に作り替え、自らの神殿を彼らのうちに建て、彼らと適正な契約関係を再び結ぶであろう。だが、1章には、メシア出現への著者の期待をほのめかすような箇所はない。神と民との関係と其中でモーセが果たす仲介的役割について知ることができるのみである。第二は23章である。ついに神は邪悪な世代に対して諸々の民を立て、その後ようやく律法を学ぶ民の新たな世代が生まれる。彼らは正しい道に立ち戻って神に従い、神の民の時代は大洪水以前の時代と同じか、それ以上に長く続く。終末の場面には、神、諸々の民、「子供」と呼ばれる新しい世代が見られるが、メシアはいない。

『シビュラの託宣』第三卷（旧約聖書偽典）

大部分は紀元前2世紀半ばに書かれた。冒頭で一人の王への言及がなされるだけだが、3.652-795は「内容的にはほぼ全面的にメシア的である」（Schürer 1979、501）。だが、コリントは太陽から到来するその王は「恵み深いプトレマイオス朝の王」であってユダヤのメシアではない、とする。「『シビュラの託宣』は異邦人の王を救済者として是認する点で『第二イザヤ書』に類似している。紀元前550-150年

頃の大部分のユダヤ人の希望は、民族的独立よりもユダヤの民を保護し支援する恵み深い大王にかけられていた」(Collins 1995、39)。

『レビの遺訓』2-5章、『ユダの遺訓』24章(旧約聖書偽典『十二族長の遺訓』より)

『レビの遺訓』の成立年代は不明である。現在の形はキリスト教的だが、より古いユダヤ教の書物、多分、クムラン出土のアラム語の『レビの遺訓』(紀元前3世紀頃)が現存テキストの基礎と考えられる。この書の2-5章で、ヤコブの12人の息子の三男レビは、自らが経験した夢の幻(天上の旅)を語る。彼は、神が彼と四男ユダを通じて全人類を救済することを告げられる(2:11)。天使はレビに七つの天の本質と人間の罪について語り、神が人間を裁く時には種々の天災が起こると預言する(3)。レビは彼が不義から遠ざけられ神のもとで仕えたいと祈ると、その願いは受け入れられる。5章の玉座の幻の場面で、レビは天の神殿で神の祭司に任じられる(5:1-2)。しかし、それは過去の出来事として示され、終末の祭司に任じられるのではない。ここでは、到来が預言されるイエス・キリストのみがメシアとしての称号を授けられ、神の子と呼ばれる。他方、18章では、書き手は歴史の終りに「その時主は新しい祭司をたてる」(2)と預言するが、その者は数々の偉業のほか、審判を実施し、光によって闇を取り除き、理解と聖別の霊を受け、異教徒たちを啓蒙し、罪を取り除く。だが、この章は『遺訓』のキリスト教的改訂であり、レビの子孫から出る祭司的メシアではなくイエス・キリストに関連している(Hollander and de Jonge 1985、179-82)。

メシア的と解されてきたのは、『レビの遺訓』18章と『ユダの遺訓』24章の2つの類似したテキストである。前者は上述のように、レビの家系から出るのではない新しい祭司としてイエスに言及している。後者は次のように預言する。

これらのあとでヤコブから平安のうちに星がお前たちにのぼり、わたしの子孫の中からひとりの男が義なる太陽のように立ちあがり、人々と柔和に正しく歩く。彼には罪がまったくない。天は彼に開かれ、雲が聖なる父の祝福を注ぎ、彼はお前たちに恵みの霊を注ぐ。お前たちは真に彼の息子となりその命令を一から十まで守る。この至高の神の若枝、すべてに生命を与えるこの泉。その時わたしの王国の笏が輝きわたり、お前たちの根から[芽]が出る。それか

ら義の杖が異邦人にはえ出て、主を呼ぶ者すべてを裁き、救う。(5巻279-80)

著者はヘブライ語聖書のさまざまな箇所を依拠している。だが、少なくとも現在の形においては『ユダの遺訓』24章はキリスト教的であり、明確にユダヤ教的メシア思想の一類型を示すものではない、と述べるのが最も安全であろう。『遺訓』の中には〈二人のメシア思想〉はない。レビとユダを扱っているパッセージ中で救世主像が生じる時は常にただ一人であり、明らかにイエス・キリストが指し示されている(Hollander and de Jonge 1985, 61)。

「エノクのたとえの書」(『第一エノク書』37-71章。旧約聖書偽典)

大洪水以前の長老によって語られる3つのたとえ話は、メシア的人物の詳しく複雑な取り扱いを示す最古のユダヤ教黙示文書の一つである。この部分は死海文書中に断片が認められていない。この書の成立時期については論争があり、3世紀後半説(Milik 1976, 89-98)、紀元前1世紀ないし紀元1-2世紀説があるが、紀元前1世紀末よりも遅い成立であることの決定的エビデンスはないように思われる。

71章14節では、エノクその人と認められるメシア的指導者に4つの称号が与えられている。第一の「義人」は、47章1及び4節(「義人たちの祈り」、「流された義人たちの血と義人たちの祈り」[4巻211])では集合体に用いられているようだが、53章6節(「こののち、義人にして選ばれたおかたが現れ、彼に帰依したものの教団は、これよりのち、靈魂の主の名のゆえに、妨げられることはない。」[4巻216])では終末における1人の人物に対して用いられている。第二の称号は「選ばれた者」、第三は「油注がれた者(メシア)」、第四は「人の子」である。「油注がれた者(メシア)」は「たとえの書」の中で2箇所見られる。一箇所目は48章10節、「彼らの苦難の日、地上には休息がおとずれるであろう。彼らは彼の前に倒れたまま立ち上がれない。手をのべてひきおこしてくれる者もない。靈魂の主とその油注がれた者(メシア)を否定したゆえに」(4巻212-13)。もう一箇所は52章4節である。ここで天使はエノクに、彼が目にする自然現象は「油注がれた者」の支配に仕えるのだと説明する。このことから、そのメシア的人物は何らかの支配を行う者であることがわかる。「選ばれた者」は15、16箇所に見られる。この者は「選ばれた者たち」と称される集団と関係しており、審判の日に彼は栄光の玉座に座し

(45:3 他)、邪悪な者たちを裁く (55:4)。彼は「選ばれた者たち」にとって慰めと力の源であり、彼の栄光は永遠に続く (49:2 参照)。そして「ありとあらゆる知恵の奥義をその口は注ぎ出す」(51:3、4 卷 214)。53 章 6 節では、この人物は「義人」とも呼ばれる。最後に、「人の子」は 16 箇所見られる。「人の子」は栄光の玉座に座し、邪悪は彼の前から去り、彼の言葉は力強い。エノクは「人の子」と同一とされる (71:14)。62 章 7 節では、「人の子」は隠されているが「選ばれた者達」に啓示される、とある。王や力ある者は彼の前に倒れる (62:14 ; 63:11) が、他方、義にして選ばれし者たちは彼とともに永遠に生きる。69 章 25-27 節によれば、「人の子」の啓示を受ける者たちは幸福になるが、罪人たちは彼の審判によって破滅する。そして、70 章 1 節と 71 章 17 節は、「人の子」であるエノクは地上から取り去られた後、天上で長い生を楽しむこととなる、と述べている。上の 4 つの称号は全て等価、相互交換可能であり、同一人物を指し示している (VanderKam 1992、185-86)。この書のメシア的指導者は、終末に邪悪な者らを裁き、苦難の中にある選ばれし者たちの義を証し、現下の悲惨な抑圧状況からの大いなる逆転をもたらすとして称賛される一人の人物である。

『第二バルク書』(旧約聖書外典)

紀元 70 年、ローマ帝国はユダヤ人に敗北と破滅を強いた (第 1 次ユダヤ戦争) が、これに対してユダヤ人著述家が行った文筆による応答の一つが『第二バルク書』である。この書のテキストはシリア語のものしか残っていない。成立は紀元前 1 世紀末頃であろう。ユダヤの災厄とその理由に関するバルクと神の長い対話を含み、神の言葉は終末の預言の色合いを帯びている。そうした預言中で筆者は一人のメシアに言及する。黙示は 26 章のバルクの問いから始まる。「来たらんとするその患難は長く続くのでしょうか、その窮乏は多年にわたるのでしょうか」(5 卷 100)。神の返答は災厄の 때가 12 の部分に分けられ、それぞれが幾分重なり合うことを示す。災厄は全世界に生じるが、神は聖なる地に見出される者しか保護しない。「これらの地域で起こるべく予定されていることが完了したときメシアがはじめて姿を現すであろう」(29:3、5 卷 102)。ベヘモート、レビヤタンの 2 つの怪物の消滅、異常な豊作、マナの倉が再び開かれることが時の終り (29:8) のしるしと

なる。メシアは予告なしに出現するのではない。「そののち、メシアの滞在の時が充ちて彼が栄光のうちに帰還されるとき、そのとき、彼に望みをつないで眠っていたものはみな復活するであろう」(30:1、5巻103)。正しき者らの魂は喜び、一方、邪悪な者たちの魂は苦しみの時が到来したことを知り打ち沈む(30:5)。

後に、森、葡萄の木、泉、レバノン杉のイメージを用いた黙示(35-40)の中にメシアは再び現れる。夜の幻(36:1)の中でバルクは、その下に泉が湧き出る葡萄の木が森を水没させ、根こぎにして、周囲の山々を打ち倒すのを見る。最後には泉は非常に勢いを増したので1本のレバノン杉だけが残される。葡萄の木はレバノン杉が邪悪な者たちを存続させているとして非難し、目下の苦難と未来の審判へとレバノン杉を引き渡す。最終的にレバノン杉は燃やされ、葡萄の木は成長し、周囲の谷間は色あせぬ花々で満たされる。バルクはこの幻についての説明を乞い(38)、神から説明を受ける。森は、ダニエルの第4の獣の幻が表す第4番目の勢力(ローマ帝国)である。「それが没落する最後の時が近づくと、わたしが泉とぶどうの蔓に似せたわたしのメシアの支配が姿を現わすであろう。それは姿を現わすやいなや、その多数の軍勢を絶滅させるであろう」(39:7、5巻109)。

その大軍は全滅し、(ただひとり)生き残る最後の司令官(注 レバノン杉)は縄をかけられてシオン山にひかれてのぼってくるであろう。わたしのメシアはありとあらゆる彼の犯罪について彼を告発し、彼の前に彼の軍勢の行状のかずかずをあらいざらい並べたてるであろう。そののち彼(メシア)は彼を殺し、わたしの民の生き残りであつたわたしが選んだところにいる者たちを保護するであろう。彼の支配は永遠に、朽つべき世が終わり、前述の時が充ちるまで存続するであろう。(40:1-3、5巻110)

メシアは53章でもう一度登場する。交互に訪れる闇と光の時代がそれぞれに対応する雲の色によって表され、そのことの説明の最後にメシアは現れる。「前記(の災難)をすべて免れ助かった者は、勝者も敗者も、わがしもべメシアの手に渡されることになろう。地はその住民を食い尽くすであろう」(70:9-10、5巻138)。72-73章は、黒い水の後に続く輝く水の時代に起こることを詳しく述べる。「前にきみに告げられたところのしるしが現われ、もろもろの民が混乱に陥り、わたしのメシアの時が到来すると、彼はすべての民に呼びかけ、あるものは生かし、あるも

のは殺すであろう」(72:2、5巻139)。この全てが成就すると、「彼がこの世にあるすべてのものを平定し、その王座に永久に平安のうちに着席されたのち、そのとき幸福が現われ、安らぎが姿を見せるであろう」(73:1、5巻140)。至福の平和がこれに続く。

『第二バルク書』のメシアは、征服者、勝者たる王であり、その栄光ある出現が終末の災厄後の変化のしるしとなる。彼は最後の恐ろしい敵を打ち倒し、腐敗した世の終りまで統治する。彼はあらゆる民を裁き、永遠の平和の中で彼が玉座に座すときには、大いなる喜びがある。彼に希望を置く者たちは、たとえ彼らが死んでいても、その輝かしい統治の恩恵にあずかるのである。

『第二エズラ書』(ウルガタ聖書の『第四エズラ書』に同じ。旧約聖書偽典)

『第二エズラ書』も、ローマが行ったエルサレム、神殿、ユダヤの民の破壊に対するユダヤ側の応答である。第一神殿の焼き討ちから1世紀以上の後、神殿再建時の指導者エズラの名のもとに書かれた。ラテン語版しか残存していないが、おそらく同時期にヘブライ語で書かれた他のユダヤの著作に見られる特徴を備えている。この書では、預言者(エズラ)は神の民が経験してきた災厄を神はどのように正当化するのかと問い、彼と天使ウリエルとの間に対話が行われる。現存テキスト中では3-14章にユダヤ教的な特徴が見出されるが、一方、1-2章(『第五エズラ書』)及び15-16章(『第六エズラ書』)はキリスト教的であり、キリスト教徒たちがユダヤ教の著作を保存し、伝えたという事実の証左となっている。『第五エズラ書』は堂々たる若者として描かれる救世主についての教えを含むが、この救い主はイエス・キリストである。だが、ユダヤ教的記述(3-14章)は独自の明確なメシア像を示している。第3の幻(6:35-9:25)において天使は「油注がれた者」についてエズラに開示する。

すなわち、見よ、次のような時が来る。その時私があなたに予告した徴しが来たり、眼に見えぬ都市が現われ、今隠れている地が顕わとなる。そして私が予告した災禍から救われた者はみな、私の驚くべき業を見るだろう。すなわち我が子メシアが従う者と共に現われ、(その時地上に生きて)残れる者に四百年間の喜びを与えよう。そしてこれらの年のあと、私の子キリスト(受膏者す

なわちメシア)と人間の息をもつすべての者は死ぬだろう。それから世は七日間初めの時のような太初の沈黙にかえり誰一人生き残る者はないだろう。そして七日の後、まだ目覚めぬ世は起され、過ぎゆく世は滅びるであろう。(7:26-31、5巻185)

この後、至高者(神)は約7年の間審判を行う(7:32-44)。メシアは神の子である。400年間支配した後メシアは死ぬが、審判に参加するために復活するか否かは述べられていない。

メシアについての次の言及は第5の幻すなわち鷲の幻(11-12章)において見られる。「十二の羽毛のはえた翼と三つの頭がある」(11:1、5巻205)鷲は海からやってきて地上の全土を支配する(5)。最後に一匹の獅子が鷲の悪政を非難するために立ち現れ、その滅亡を宣告する(11:36-46)。鷲は、ダニエルの幻の第4の獣(すなわちローマ帝国)と同一視され、遂には滅ぼされる(12:1-3)。エズラの乞いに応じて天使は説明する。

ライオンは森から起き上がって吼えながら鷲に向かって語り、あなたが聞いたように、あらゆる言葉で鷲の不義を非難した。これは膏注がれた者、至高者が時の終りまで、彼等とその不虔のためにとっておかれた者である。彼は彼等をその不義ゆえに非難し、彼等の前にその恥すべき業をつきつけるだろう。彼は先ず彼等を生きたまま裁きの座に立たせ、その罪をあらわしてのち、彼等を滅すだろう。しかし彼は我が民の残れる者、すなわち我が領土中の救われた人々を憐れんで解放するだろう。そして終末すなわち裁きの日が来るまで彼等を喜ばすだろう。その日については私はあなたに初めから話しておいた。(12:31-34、5巻209)

ここでは、7章と異なり、メシアは審判を行い、上述の鷲を断罪する。最後の審判はメシアによる至福の統治の後に到来する。その意味では、12章の記述は7章のメシアによる一時的な統治と矛盾しない。ダビデの血を引くメシアは神の民の解放と救済の仲介者でもある。

エズラの第6の幻は、メシアが言及される最後の場面である。ただし、その者は「油注がれた者」と呼ばれるわけではない。夢の中でエズラは風が海をかき立て、「その人が天の雲と共に飛んで……彼が顔を向けて見つめるたびに、見られたもの

はみな恐れおののき……彼の口から声が出ると、どこでもこれを聞いたすべての者は、火に触れた蠟が溶けるように燃え上がる」(13:3-4、5巻211)のを見た。「人のようなもの」を倒そうと群衆が集まってくると、「その人は自分のために大きな山を彫り出し、その上に飛び上がった」(13:6、同上)。群衆が攻撃すると、エズラは「人のようなもの」が「その口から火の流れのようなものを吐き出し、その唇からは焔の息を、その舌からは嵐のような火花を吐き出すのを見た」(13:10、同上)。群衆は焼き尽くされる。「この後私はその人が山から降りて、別の平和な群衆を自分のもとに呼び集めるのを見た。彼のもとに多くの人々の顔が近付いて来た。ある者は喜び、ある者は悲しみながら、ある者は縛られ、ある者は捧げ物にする人達を引き連れていた」(13:12-13、5巻212)。

エズラは天使に解釈を乞い、海からやってくる者は「至高者が長い間とおかれた人」(13:26、5巻212-13)であることを知る。エズラが見ていた襲撃は次のような意味である。すなわち、普遍的な戦いと混乱の時には

……私の子があらわれるであろう。それはあなたが見た海から上って来た人である。……またあなたが見たように、来て彼を打ち負かそうとする群衆がひとつに集められるだろう。しかし彼はシオンの山の頂に立つであろう。……ところで彼すなわち私の子は、やって来た民の不虔を非難するだろう。それが嵐であらわされているのだ。また彼等の悪しき思いと受けるべき責苦とを面前に突きつけるだろう。それが焔であらわされているのだ。そして何の苦勞もなしに律法で彼等を滅ぼすであろう。それが火であらわされているのだ。そしてあなたは、彼が別の穏やかな群衆を自らの許に集めるのを見たが、これらはヨシア王の時代に捕えられ、その領土から連れ出された九つの部族である。……
(13:32-40、5巻213)

後にエズラは、その者が海から出現することは「人が、海の深みに何があるか詮索することも知ることが出来ないように、地に住む者は私の子や彼と共にある者達をその日まで見る事は出来ない」(13:52、5巻214)という意味であると告げられる。したがって、『第二エズラ書』では、神の子と呼ばれるメシア的指導者は終末まで隠されているのである。

他の黙示文書

その他、成立時期と淵源が明らかではない4つの黙示文書について簡潔に言及する。第1は『ゼパニヤの黙示録』（紀元前1世紀-紀元1世紀頃）。断片的に残存するテキストの多くが、第五天における預言者ゼパニヤの経験と出会い、ハデスと深淵、天の都などについて語る。終末の日々が描かれているようだが、メシア的人物は登場しない。第2の『第二エノク書』は、エノクの地上での最後の日々と、子供たちに別れを告げる前に与えられた啓示を語る。詳しく述べられる主題は天地創造である。終末は描かれるがメシアは存在せず、エノク自身もメシア的役割を果たしているようには見えない。第3は『アブラハムの遺訓』（紀元1-2世紀）である。アブラハムが死すべき時が近づいたとき、彼は彼を連れ去ろうとする神の使者たち（ミカエル、死）に抗い、さまざまな魂が身体を離れた後にどのような審判を受けるかを見せられる。だが、終末の指導者については何も述べられない。第4は『第三バルク書』である。紀元後早い時期に書かれ、バルクによる5つの天の巡歴を含む。バルクに開示される神秘の一つは神の命令への従順と不従順の結果である。最後の審判は重要な主題ではなく、メシアへの言及もない。

(2) 黙示文書以外のメシア的指導者 (pp.127-34)

続いて、形式的には黙示文書ではないがメシア的人物が登場するテキストを取上げ、メシア思想と黙示思想の関係を探る。終末の時の指導者としての「油注がれた者」が最も早く登場するのは死海文書と『ソロモンの詩篇』である。前者は通常と異なり2人のメシア的人物を示すが、後者の17-18篇はダビデの家系から出た1人のメシアについて述べている。死海文書が何らかの点で関係しているクムランの共同体に黙示文書を書いた著述家がいたというエビデンスはなく、『エノク書』の伝統に属する黙示文書を引継いだと思われる。

死海文書におけるメシア達

クムランの洞窟から出土したテキストでは、祭司であるメシアとダビデの家系の（すなわち聖職者ではなく世俗の）メシアの両方が到来を期待されていたことが、一連のパッセージによって証明されている。ダビデの家系のメシアは「ダビデの

枝]、「会衆の君」とも呼ばれ、祭司である指導者はメシアの他、「律法の解釈者」、「祭司長」とも呼ばれている。また、死海文書にはこれらの他にもメシア的人物たちについての言及が見られる。

① 2人のメシア

死海文書はイスラエルから出たメシアとアロンから出たメシア、すなわちダビデの血筋のメシアと祭司であるメシアについて述べている。この種の言及の最古と思われるものは『宗規要覧』に含まれている。「またおよそ律法の助言から離れて自分たちの心の頑ななままに歩いてはならない。そうではなく、共同体の人びとが初めに教えられた最初のおきてによって支配されるべきである。一人の預言者とアロン及びイスラエルの受膏者（メシア）たちが現れる時まで」（1QS [注 クムランの第一洞窟出土の『宗規要覧』の略号] 9.9-11、108）。⁵メシアの人数は述べられていないが、「アロン及びイスラエルの」という言葉がコンストラクト・ステート⁶の節を完結させていることから、メシアは2人であるという結論が支持される。写本では複数のメシアと読むことに誤読の余地はないが、このパッセージが真正のものであるかについては論争がある。重要な点は、紀元前100年頃に成立した1QSが祭司のメシアと俗人のメシアの両方への言及を含んでいることである。預言者とメシアたちの登場は邪悪な時代の終りの先駆けであり、共同体の構成員は彼らの到来まで最初の教えに従うこととなっている。1QS中ではメシアたちの活動について他に何も述べられていない。

『ダマスコ文書』（CD）でもメシアに関して類似した記述が見られる。ただし、1QS（『宗規要覧』）とCDの用語上の重要な相違は、前者が「メシア」の語を複数形で用いているのに対して、後者では単数形で使われている点にある。CDには1QS中のメシアに関する記述を想起させる箇所が少なくとも4つある。CD12:23-13:1には「アロンとイスラエルとの受膏者（メシア）が現れるまでの悪の時期に、これらに従って歩む者は……」（272）とある。CD14:18-19も同様で、「そしてこれはアロンとイスラエルとの〔受膏者（メシア）が現れて〕彼らの罪を購う〔までの悪の時期に彼らが歩むべき〕もろもろのおきての細則である」（274）。CD19:10-11は、『ゼカリヤ書』13章7節（「万軍の主は言われる、『つるぎよ、立ち上がってわ

が牧者を攻めよ。わたしの次に立つ人を攻めよ。牧者を撃て、その羊は散る。わたしは手をかえして、小さい者どもを攻める。』)にある戦いについて次のように語る。「これらの者達は天罰の時代に免れる。だが、とどまるあれらの者達はアロンとイスラエルのメシアがやって来る時には剣へと引き渡されるであろう。」最後に、19:33-20は、メシアの到来を現下の時代の終りを明示するために用いている。「そしてこのように、ダマスコの地で新たな契約に入り、生命の水の井戸に背き、裏切り、離れた者の全ては、唯一の「教師」の〈教える者の／教師の〉〔原文ママ〕審理の日からアロンとイスラエルのメシアが起こる時まで、会衆の中に数えられず、彼らの名簿の中に記されないであろう。」4例すべてにおいて「メシア」の語は単数形であるが、「メシア」はアロンとイスラエル両方の性質を持っている。実際、CD20:1の「アロン」、「イスラエル」の二つの語は各々が「から」の意の前置詞を伴っている。

② メシアと祭司

死海文書には「アロンとイスラエルのメシアたち」、「アロンとイスラエルのメシア」という表現は上の他には無いが、ダビデの血筋のメシアが祭司とともに現れる箇所が幾つかある。これらの箇所は祭司にメシアの称号を与えていないが、上と同じ「2人のメシア」思想が示される。メシアと祭司が司る終末の食事に関する『会衆規定』(1QSa)では、「これは、世の終わりに、[一つに]集まったイスラエルの全会衆のための規律である」(1:1、115)という文言から始まり、2:11-12aで神がメシアを啓示する共同体の集会のことが述べられ、続いて、

イスラエルの全会衆の長なる〔祭司〕と召集に〔呼ばれた〕祭司アロンの〔彼の兄弟達や息子達〕全員、集会へと(召集された)祭司達、名ある人びとが来て、そして彼らは(各々彼の)前に位に応じて座す。その後に、(イスラエルのメシアが来て)彼の前に(イスラエルの諸氏族の)長達が各々その位に応じ、彼らの陣営と彼らの土地における(地位)に応じて座す。(2:12-15、117)

そして、食事が整えられると、

飲むためにぶどう酒を〔注ぐ〕時に、だれも祭司より前にパンと〔ぶどう

酒]の最初のものに、彼の手を[出してはならない]。なぜなら、[彼が]パンとぶどう[酒]の最初のを祝福し、最初にパンに彼の手を[出すべき]だからである。その後[に]、イスラエルの受膏者(メシア)がパンに彼の手を[出]し、[その後]、共同体の全会衆が各[々]その位に[応じて祝]福する。少なくとも十人集[まる時には]、この定めに従って、すべての準[備を]しなければならない。(2:18-22、118)

テキスト冒頭ではメシアの食事は終末のためのものとされているが、最後の行では繰り返される行事であることが示唆されている。祭司ではない指導者だけがメシアの称号を与えられている。祭司もメシアと考えられたのだろうが、その称号が付されることは特段ない。

2人の終末の指導者たちがともに現れるがメシアの称号は両方に与えられるわけではないというパターンは、クムラン出土の多数の他のテキストでも同様である。4Q174(『詞華集』)では、王朝の永続をダビデに約束する部分で筆者は言う。「これは『ダビデの枝』(を指している)、終末の日々にシ(オンで)(現れるであろう)律法の解釈者とともに現れるであろう」(1-3 i 11-12)。「ダビデの枝」はダビデの血筋のメシアのための称号であり、「律法の解釈者」は祭司であるメシアの称号の一つである。引用部では、2人は終末の日々に一緒に現れると期待されている。4Q252(『創世記註解』)の『創世記』49章、ユダへの祝福の解釈の箇所でも、「律法の解釈者」は「メシア」、「ダビデの枝」の両方で呼ばれる指導者(王にふさわしいこれら二つの称号は同一人物を指す)とともに存在していることが示唆されている。

『ダマスコ文書』(CD)も類似した箇所を含んでおり、繰り返される「アロンとイスラエルのメシア」という語句は2人のメシアを意味するという考えを支持する。CD7:14-21では、『アモス書』5章26-17節の意味が、同書9章11節と『民数記』24章17節にある補足情報を用いて解明される。『アモス書』5章26節の「星」(「あなたがたの星の神キウン」)についてCDの書き手は次のように書いている。「そして星とはダマスコに来た律法の研究者のことであり、『ヤコブから一つの星が出、イスラエルから一本の杖が起った』(『民数記』24:17)と記されているところのものである。この杖はすなわち全会衆の指揮者であって、彼が現れるとき、セツのす

べての子らを打ち倒すであろう。これらの人びとは第一の刑罰の時期に逃れた」(7:18-21、261)。CDの書き手は、『民数記』24章17節が2人の指導者に言及しており、これら2人は1QS(『宗規要覧』)とCDの2人のメシアであると考えている。

『イザヤ書註解』(4Q161 [4OpIsa])も同様である。書き手は『イザヤ書』11章の注釈中でダビデの血筋のメシアに言及する。ダビデの名は第22行の空所直後に現れ、続いて終末への言及があり、24行目では「玉座」と「王冠」、25行目では「支配する」、「裁く」の動詞が続き、28-29行目は次の通りである。「28 […] 彼らが彼に教えたように、彼は裁くであろう、そして彼らの命に従って29 […] 彼とともに。名のある祭司の一人が出て行くであろう……。」名のある祭司はメシアと同一視されていないが、少なくとも彼はダビデの血筋のメシアと一緒にいるようだ。そして一群の祭司たちは正義に関する事柄をメシアに教えるようだ。

『イザヤ書』10章34節-11章1節を典拠とする所謂『戦いの規律』(4Q285)の断片4-5もダビデの血筋の指導者と祭司に言及している。断片4は「全会衆の長」(133)に二度言及しており(第2、6行)、彼がキッテム⁷に対して行った戦いを描いている。断片5は次のように述べている。「3 […] ダビデの薔 [すなわち枝] は […] と戦うであろう4そして会衆の君は彼を殺す、ダビデの薔 […] 5 […] と傷によって。そして祭司が命を下すだろう […] 6 […] キッテムの破滅 […]。」ダビデの血筋のメシアは2つの称号を帯びて顕著に描かれている。祭司についてはこれ以上わからないが、戦いにおいて命を下す役割を果たしている。

③ クムラン・テキストにおけるメシアについての他の言及

死海文書の別なテキスト群には、ダビデの血筋であれ祭司であれ、1人だけの指導者に言及し、「メシア」という称号を用いていないものもある。『戦いの規律』(1QM)、『祝福の言葉』(1QSb)、『メシアの黙示』(4Q521)、『アラム語の黙示』(4Q246)などがそうである。

『ソロモンの詩篇』(旧約聖書偽典)

ソロモンの名の下に伝わる一連の詩は紀元前1世紀後半に書かれた。同詩篇第

17、18 篇はダビデの家系から出るメシアに対する希望を表現している。筆者は、神を永遠の王であると繰り返し告白し、その文脈中にメシアに対する彼の信仰を位置づけようとしている（17:1、26）。彼は、ダビデの家系ではない邪悪な者が自らを王に立てた（明らかにハスモン家 [マカベア家とも]。「あなたが約束を [なさ] なかったもの [達]」 [17:5]）のはイスラエルの罪の帰結であると指摘する。神は彼らを裁き、ポンペイウスと思われる異邦人によって彼らを打ち倒した（17:6-9）。外国人の征服者の奢りと暴力のために苦難の時代が続く。ハスモン家とローマ人による支配下の災厄の中で、筆者はダビデの家系から出る新しい「油注がれた者」への憧れを明確に述べている（17:21-44）。この箇所と 18:5-9 は次の 4 項目に要約できる。

① メシアの性質

メシアはダビデの子孫（17:21）である王（17:21、32）である。彼は「メシアの君」と呼ばれ、潔白で罪とかかわりなく（17:36）、彼が行うことは全て正義にかなう。

② メシアの神との関係

神は事をなし制御する至高者である。神は「油注がれた者」をその者の時（17:21）に立たせ、異邦人を放擲する力で彼を援ける（17:22）。審判者（メシア）に導かれる人びとは神が聖別した者たち（17:26、27 参照）である。メシアは神を高い所（エルサレム。17:30）で讃美し、そこで諸々の民は神の栄光（17:31）を見る。正義の王としてメシアは神によって教えを受ける（17:32）。「彼は生涯神により頼み力を失うことはないだろう。神は聖霊により彼を力あるものとし、力・正義と並んで理解の意志を付与して賢明なものとしたからだ」（17:37。5 卷 62）。神の祝福は彼にとどまり（17:38）、彼の希望は神にある（17:39）。彼は「業において力あり、神を畏れて強く、誠実と正義をもって主の群を牧し、牧場の群のなかから弱いものをささないだろう」（17:40、5 卷 63）。神はメシアの時にイスラエルの幸運を引き起す（17:44）。神は祝福の時への備えとしてイスラエルを清める（18:5）。主を恐れることがメシアの統治のしるしとなる（18:7-9）。

③ メシアのイスラエルとの関係

メシアは神の僕イスラエル（17:21、35；18:5）を治める。彼らは人びとを集め、

正義により彼らを導き（17:26）、裁き（17:26、43）、彼らの正しき王（17:32）となる。彼はエルサレムを清める（17:30-31）。彼は主の民を智慧と善意とで祝福し（17:35）、牧し、神聖と戒律の中で導く（17:40-42; 18:7 参照）。彼は主を恐れる正義の業の中で彼らを率いる（18:8-9）。

④ メシアと諸民族との関係

メシアはエルサレムから異邦人を追放し（17:32）、「律法をおかすもろもろの民を彼の口の言葉で滅ぼす」（17:24、5巻61）。彼らは彼の警告に逃げ出す（17:25）。彼は「正義にかなった知恵で群衆やもろもろの民を」（17:29、同）裁く。民は彼に仕え（17:30）、彼と神の栄光を見るためエルサレムへと赴く（17:31）。彼は彼を敬う人びとには思いやり深い（17:34）。

『ソロモンの詩篇』のメシアは、神が智慧、正義、神聖、主の恐れといった大いなる贈り物を与える非凡なる人物であるが、彼は神に忠実に仕える人間の君主であり続ける。

フィロンとヨセフス

アレクサンドリアのフィロン（前15頃-45頃。ユダヤ人哲学者）やフラウィウス・ヨセフス（37頃-100頃。ユダヤ人歴史家。『ユダヤ戦記』、『ユダヤ古代誌』など）の著作にも、メシアへの言及と思われる箇所が見られる。フィロンは『報償と懲罰について』で、一人の者が神に助けられて多くの民を従えるであろう、と述べている。だが、その者が終末の支配者なのか歴史における支配者なのかは明記していない。

ヨセフスは何度か「メシア」の語を用いているが、「メシア」についての彼の考えは示されていない。メシア的な含蓄が見られるのは、『ユダヤ戦記』中、ユダヤ人が対ローマ戦争の前に受けた予兆についての作者の省察の部分にある有名な「曖昧な託宣」の箇所である。

だが何よりも彼らを戦へと駆り立てたのは一つの曖昧な託宣であった。その託宣はやはり彼らの聖典の中に見出されたもので、その時には彼らの国から出た一人の者が世界の支配者となるという趣旨であった。彼らはこれを彼ら自身の民より出る誰かを意味するものと解し、賢者たちの多くはその解釈に迷っ

た。だが、その託宣は実はユダヤの地の皇帝への即位を宣したウェスパシアヌスの帝権を意味していた。(6.312-13)

また、ヨセフスは『ユダヤ古代誌』でイエスに二度言及している。18章63節の「彼はメシアであった」は何らかのキリスト教的編集の介入の産物とするのが通説である。また、20章200節、「キリストと呼ばれたイエスであった」はヨセフスによる単なる報告である。なお、ヨセフスは群衆を集め、その支持を得ようとした偽預言者達についても触れている。「サマリア人」と呼ばれる者（『ユダヤ古代誌』18.85-87）、律法学者ガマリエルが『使徒行伝』5章36節で同じ者に言及している「チウダ」なる者（同20.97-99）、『使徒行伝』21章38節で使徒パウロが千卒長（古代ローマの軍団司令官）に人違いをされた者のことであると思われる「エジプト人」と呼ばれる者（同20.169-72）などがその例であるが、ヨセフスはこうした者達を一切「メシア」または「メシアと呼ばれる者」と呼んでいない。

メシアと反乱

66-70年、132-35年のユダヤ人によるローマへの反乱（第1次、第2次ユダヤ戦争）、及び115-17年の離散ユダヤ人による蜂起は、メシア出現の申し分ない機会でありえた。だが、第1次ユダヤ戦争の際に誰かがメシアを名乗ったというエビデンスはまったくない。ガリラヤ人ユダの息子メナヘム（『ユダヤ戦記』2.433-48参照）とシモン・バル・ジオラ（同7.26-36参照）は王を詐称したが、ヨセフスは彼らがメシアを自称したとか、もしくは彼らをメシアとする主張については何も記述していない。トラヤヌス帝治下の離散ユダヤ人による蜂起は、一人または複数のメシア的指導者を伴ったかもしれない。エウセビウスはキュレネの長をルクアス（『教会史』4.2）と呼び、指導者と王の称号を彼に付した。ディオ・カッシウスは彼にアンドレアスの名を与えている（『ローマ史』68.32）。後者は、アルテミオンという名のキプロスを襲った反乱の指導者にも言及している。こうした蜂起をメシア的性質のものとする学者もいるが、反乱の性質についてのエビデンスは非常に乏しいのである。

第2次ユダヤ戦争（132-35年）は、ユダヤ側の軍司令官シモン・バル・コシバがラビ（律法学者）・アキバによってメシア王と認められたという意味でメシア

的であった。アキバは彼を「一つの星 (kôkâb) がヤコブから来るであろう」という『民数記』24章17節の預言と結びつけたと考えられている。これによりシモン・バル・コシバの名前はもじられ、彼の名は「バル・コクバ (星の息子)」となった (エウセビウス『教会史』4.6, 2参照)。だが、ラビ・アキバの意見は皆に賛同されていたわけではなく、シモンの統治に関連づけられている手紙やコインは彼に王、メシアのいずれも用いず、「イスラエルの君」と称している。反乱が不首尾に終わると、彼は「シモン・ベン・コズィバ」つまり「嘘の息子」と新たに名づけられ、シモンに関する記憶は非難された (Horsley and Hanson 1985, 127-29)。

3 結論 (pp. 134-37)

以上、ユダヤ教黙示文書内外でのメシアに関するエビデンスの調査により、次のことが確認できた。紀元前2世紀以前のユダヤ教黙示文書 (「天文の書」、「寝ずの番人の書」など) には、終末論的意味でメシアと呼べる人物について述べているものはない。終末に関してメシアと関連がない記述がなされることは、初期ユダヤ教には頻繁に見られる。メシア的人物が示唆される最古の黙示文書は「動物の黙示録」で、紀元前160年代後半の成立である。その後のユダヤ教黙示文書には、メシアに関する記述を含むものもあれば、含まないものもある。形式的には黙示文書ではないが黙示的もしくは終末的な教えを示す幾つかの書には、メシア的人物に言及しているものや、メシア的人物についての章を含むものがある。だが、その数はごくわずかである。第二神殿期 (前516-70年) のユダヤ教テキストの大多数が終りの時のメシア的指導者についてなんら言及していない。歴史書などの多くの著作にもメシアへの言及が含まれているとは考えられない。メシア的な考え方は、当時の著作が残存しているユダヤ教の著述家たちの間では主流のアプローチではなかったと言える。

メシア信仰について述べているテキストは、メシアと考えられた者やその事績について単一ではなく多様なイメージを示し、1人のメシアの到来を予想した著者もあれば、2人のメシアを待望した者もあった。1人のメシアの到来への期待がより頻繁に示されており、2人のメシア説は死海文書においてのみ確認されている。また、初期ユダヤ教の著述家たちは、メシアに対して幾つもの称号や象徴的な呼び名

を用いた。メシア信仰の最も一般的な形は、メシアはダビデの家系から出るであろう、彼は諸々の民を打ち倒すため戦に従事し、邪悪な者を裁くであろう、というものであった。これらの意味で、彼は神の民の解放に関わり、歴史の転換点に出現することになるだろう。彼の統治は正義を特徴とするだろう。ただし、『第四エズラ書』のみがメシアによる統治は一時的であり、メシアは死ぬであろうという信仰を記述している。また、『ヨベル書』（及びおそらくアラム語『レビ記』）を踏まえたテキストと死海文書中の複数のテキストのみが、2人のメシアが出現し、1人はダビデの血筋、もう1人は祭司であると述べている。預言者を伴う彼らの出現は現下の邪悪な時代の終焉を示し、新たな時代の先駆けとなる。ダビデの血筋のメシアは統治と審判を行い、祭司は教え、祝福する。ある箇所では、メシアは選ばれし者たちの罪を贖うとされている。

最後に、ヴァンダーカムは、何故メシア思想がそれが生じた時に起こり、その存在が証明されているテキストの箇所に表れているのかについて考察を行い、本稿で挙げられたエビデンスによっては確たる結論を下すことはできずとしながらも、次のような仮説を示している。第二神殿期においてメシア待望が見られないこと、また、最古の黙示文書がメシアを描いていないという事実は、非ユダヤ人によるユダヤ人支配についてのユダヤ人側の態度と幾らか関係があるかもしれない。ユダヤ民族は何世紀にもわたって非ユダヤ人によって統治されてきたが、その支配は時に抑圧的、時に宥和的であった。当該統治権力がユダヤ教の礼拝を許していた限りにおいて、ユダヤ側では統治権力を幾分肯定的に考えていたというエビデンスもある。未来へのシナリオにメシアを含めた著者たちは統治権力に対して敵対的であった。「動物の黙示録」は、捕囚期及び捕囚後の外国勢力によって支配されていた全期間を70人の羊飼いによる専制支配の時期に含めているが、自民族の者（ユダス・マカベウス）による支配に対しては肯定的態度を示している。だが、異邦人による支配に対する態度だけがメシア思想の生起の原因ではないことを示唆するテキストもある。メシアへの言及が見られない『ダニエル書』の黙示的な章においても、外国の支配は非常に否定的に描かれ、マカベア一族は幾分肯定的に示されている。また、死海文書、『ソロモンの詩篇』、「エノクのたとえの書」では、異邦人と自民族の指導者たちは罰せられ、希望は現下の邪悪な不正の時代を終わらせるメシ

ア（たち）に置かれている。もっと後に、第1次ユダヤ戦争（紀元66-70年）後の、異邦人及びユダヤの指導体制の大きな失策は、『第二バルク書』や『第四エズラ書』などの書に見出される絶望とダビデの血筋のメシア到来への待望へとつながった。

¹ ノートルダム大学神学部教員紹介より抜粋 (<https://theology.nd.edu/people/emeritus-faculty/james-c-vanderkam/> 2018.8.30)。

² 本稿を通じて、聖書からの引用の訳出にあたっては日本聖書協会発行（1974年）の聖書に従う。

³ John J. Collins, "Introduction," *Semeia* 14 (1979): 14. なお、*Semeia* は Society of Biblical Literature 発行の学術誌。

⁴ 聖書外典・偽典からの引用箇所訳出にあたっては、村岡崇光訳、日本聖書学研究所編『聖書外典偽典』シリーズ（全7巻、教文館、1975年初版、1994年7版）による訳文に原則として従い、本文中では同シリーズの巻号及び頁数のみ括弧内注記を行う。なお、訳出の都合上、一部拙訳を含む。

⁵ 死海文書からの引用箇所訳出にあたっては、日本聖書学研究会訳『死海文書——テキストの翻訳と解説——』（山本書店、1963年）による訳文に原則として従い、本文中では同書の頁数のみ括弧内注記を行う。訳出の都合上一部拙訳を含む。なお、同書が扱っていない箇所についてはヴァンダーカムの英文引用を拙訳したが、その旨の括弧内注記は省略。

⁶ 構成状態。所属形とも。セム語において、1つの名詞の変化語形が後続の名詞に依存し、2つの名詞の組み合わせが属格の関係を表すもの。例 ヘブライ語の *beth david* (*house of David*) において、*beth* (*house of*) は *bayit* (*house, absolute state*) の *construct state* である。

⁷ キプロス島キチオンに由来。ギリシャ人、ローマ人の他広く非ユダヤ人に用いられた。